

自主的・実践的な態度の育成を図る学級活動の工夫

～質の高まりをめざした話し合い活動を通して～



那覇市立城西小学校教諭
猪野 由錦子

目次

I	テーマ設定の理由	53
II	研究目標	54
III	研究仮説	54
	1 基本仮説	
	2 作業仮説	
IV	研究構想図	54
V	研究内容	55
	1 質の高まる話し合いとは	
	2 話し合いにおける言語・非言語コミュニケーションのとりえ	
	3 目的意識を持たせる話し合いの工夫	
	(1) 議題収集・選定について	
	(2) 話し合う内容（柱）について	
	4 発言力を促す工夫	
	(1) 話し合いにおける児童の実態把握	
	(2) 発言を促す具体的な手だて	
	5 集団決定にむけての教師の役割	
	(1) 発達段階に即した指導のめやす	
	(2) 質の高まる話し合いにおける教師の指導・支援	
	(3) 集団決定について	
VI	授業実践	60
	1 議題名	
	2 議題選定の理由	
	3 本時までの取り組み	
	4 本時の展開	
VII	結果と考察	63
VIII	研究の成果と課題	66
	1 成果	
	2 課題	
	《主な参考文献》	

自主的・実践的な態度の育成を図る学級活動の工夫 ～質の高まりをめざした話し合い活動を通して～

那覇市立城西小学校 猪野 由錦子

I テーマ設定の理由

現代社会は知識基盤社会といわれ、国際化、情報化が進み、子どもを取り巻く環境は大きく変化しつつある。それに伴い地域社会における人間関係の希薄化が進み、家庭や地域社会において社会性を身に付ける機会が減少してきている。原因として少子化が進み、小集団で遊ぶことが多いため、子ども同士で深く関わりを持てなくなっていること等を挙げることができる。さらに、情報化の進行に伴い、自然体験や社会体験が減る反面、増えてきたのがテレビやゲームなどのメディアとの接触である。そのため、疑似体験の機会は増加したが、コミュニケーションを通しての望ましい人間関係を築くことが難しくなっている。

そこで、特別活動において実践や体験を通して実感をもって体得できる「なす事によって学ぶ」という方法原理を生かし、望ましい人間関係の構築と、他者と協力して生活上の諸問題を解決し、よりよい生活を築こうとする社会性の育成がこれまで以上に重要になってくる。そのために、一人一人が自分の考えを持ち、自らを高め意欲的に行動できる自主的・実践的な態度を育てることが必要となってくる。

学級では、自分の意見を通そうとする子、意見をうまく表現できない子等が多く見られるようになってきた。要因として、子ども同士や教師とのコミュニケーション不足による対人関係の未熟さ、協力してよりよい生活を築くことが難しくなっている社会性の未熟さが考えられる。特別活動においても、人間関係や社会性の未熟さが、話し合いの場でうまく発言ができないことや、学校生活の改善よりも、レク的な議題に偏ること等の要因になっていると考えられる。

話し合いの場を取り上げてみると、これまでの実践では、話し合いを活性化させる手だてとして、話形の型に沿って発言させることが多かった。しかし、発言することへの不安をある程度軽減はできたものの、発言内容よりも、型にはめて発言することに意識が向いていたように思う。

また、なぜ話し合いをして、実践していく必要があるのかという目的意識の持たせ方が弱かったためか、必然性のある議題として捉えられていない子もいた。これは学年が進んでも、議題に対する考え方や内容、話し合いの質等があまり変わらないことや、発言が少なくなっている原因の一つとして考えられる。

さらに、互いの意見を十分理解し合うまで話し合えていないことから、自分の考えを整理できず、結果的に多くの賛成を得た意見に同調してしまうことも多かった。

このようなことから、人間関係の構築や社会性を育成するためには、話し合いで、自分の意見が通ることや、他者の意見が通ることを経験し、他者との意見に折り合いをつけ、納得した集団決定ができる積み重ねをしていくことが必要である。納得した集団決定をするためには、互いの意見を理解することや、一人一人が発言し、自己決定できる、質の高い話し合いをすることが大切であると考えられる。話し合いが活性化すれば、互いの考えを理解し合い、協力し合って活動目標を設定したり、自分の役割や責任を進んで遂行したりする自主的・実践的な態度が育つとも考えられるからである。

そこで本研究では、話し合いにおいて、児童一人一人が目的意識を高め、自分の考えを発言できる工夫と、質の高まる話し合いにするための教師の指導や支援の工夫について取り組むことを考え、本研究テーマを設定した。

Ⅱ 研究目標

自主的・実践的な態度で活動できる子どもを育てることを目指して、集団決定に至るまでの自分の考えを発言する言語活動のあり方や教師の役割について実践的に研究する。

Ⅲ 研究仮説

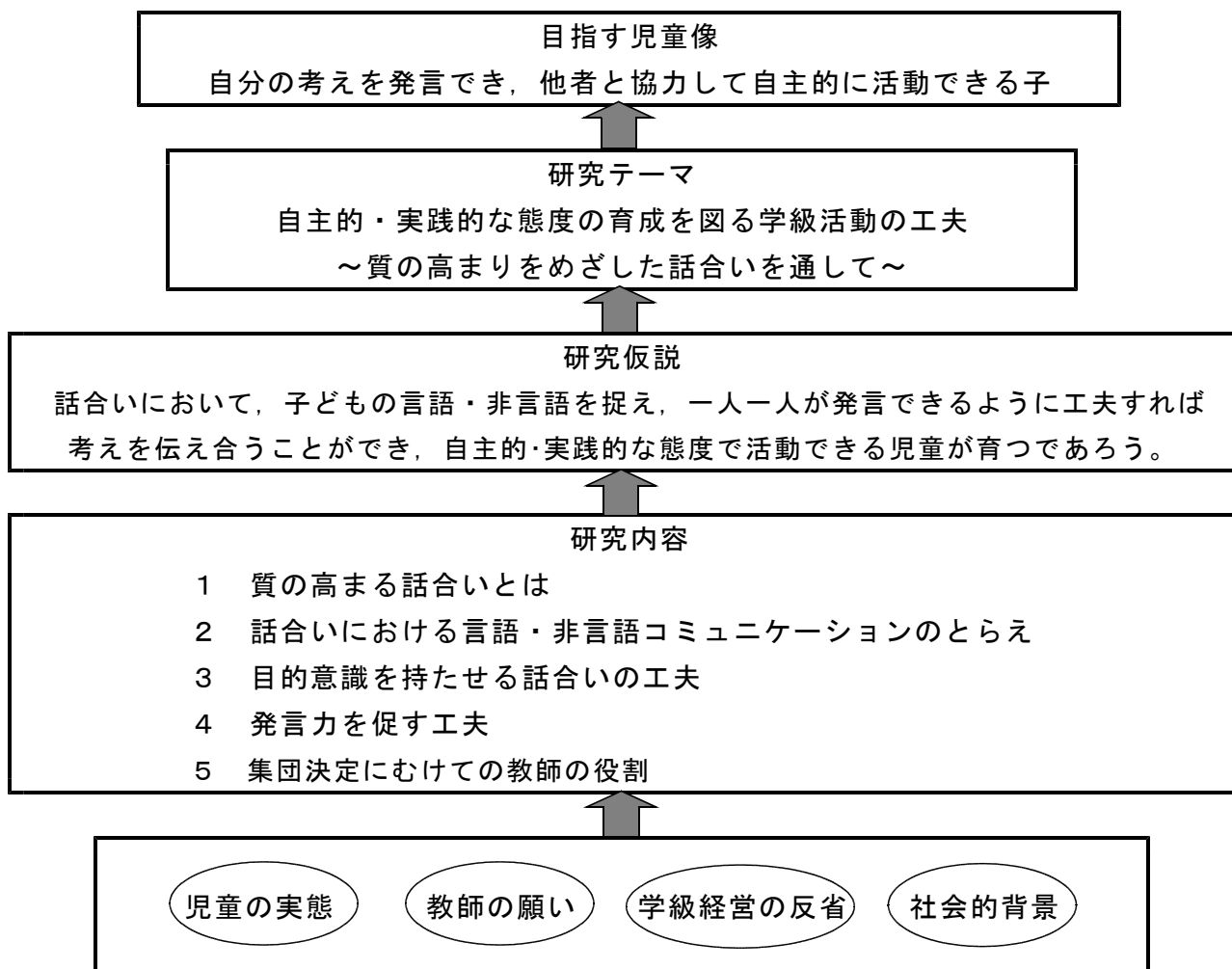
1 基本仮説

話し合いにおいて、子どもの言語・非言語を捉え、一人一人が発言できるように工夫すれば、考えを伝え合うことができ、自主的・実践的な態度が育つであろう。

2 作業仮説

- (1) 話し合いをするにあたり、議題の必然性や目的意識を持たせ、話し合いの内容を工夫すれば、自分の考えを発言できるようになるであろう。
- (2) 話し合いにおいて、教師が子どもの言語・非言語を捉え、子どもの意見をつなぐ役割ができれば、自他の意見を整理して自己決定することができるであろう。

Ⅳ 研究構想図



V 研究内容

1 質の高まる話し合いとは

質の高まる話し合いとは、子どもが自分の考えを表出することができ、意見を出し尽くした中で、納得のいく集団決定がなされることだと考える。

Mercer(1995)は、児童の話し合いを検討し、3つの話し合いに分類した分析枠組みを提案している。「①競争型の話し合いとは、話し合いの参加者の間で合意に至ることが無く、個人的な意志決定がなされるような話し合いである。知識を共有しようという試みがなされることはなく、また、建設的な批判もなされることがない。主張とそれに対する主張の応酬といった発話によって特徴づけられる。②共感的話し合いとは、他者の発言を肯定的、しかも無批判に取り入れる発言によって構築される話し合いである。相手の発言を繰り返し、確認、言い直しといった発話によって特徴づけられる。③探求的話し合いとは、参加者が相手の意見について批判的かつ建設的に関わるような話し合いである。他者の意見は協働して検討される。その際、意見は他者から挑戦を受けることになるが、そのような挑戦には理由が述べられるか、別の仮説が述べられることとなる。」

この分類から見てみると、探求的話し合いが、質の高まる話し合いと言えるであろう。理由が述べられ、なぜそう考えたかという推論過程が見えてくることで、反論するときの根拠となったり、お互いの意見を受け入れたりすることができる。たとえ集団決定が、自分の意見と異なる決定になったとしても、他者がどのように考えたかがわかることで、納得できる決定につながっていくと考える。質の高まる話し合いを行うためには、なぜそう考えたかがわかるように、自分の考えを持ち、発言できることが、互いの考えを理解するためにも大切である。

2 話し合いにおける言語・非言語コミュニケーションのとりえ

話し合いにおいては、自分の考えを相手に伝え、相手の考えを理解することが大切である。意志を表現する方法については、言葉ばかりでなく、表情や態度なども含まれる。

言語とは、「思想・感情・意志などを互いに伝達しあうための社会的に一定した組織を持つ音声による記号とその体系。また、それによって伝達しあう行為。ことば」非言語コミュニケーションとは、「言葉や文字によらないで表情・動作・姿勢・音調・接触などによっておこなわれるコミュニケーション。ノンバーバルコミュニケーション」である。

＜話し合いにみられる言語コミュニケーションの例と意欲の関係表＞（表1）

	意欲（＋）	意欲（－）
言語	- 自分の意見が発言できる - 賛成・反対の意見が言える - 質問をする - 会を進めようとする（司会） - 声のトーンが高い など 自分の思いを発言として、友だちに伝えることができる子	- 話し合いに関係のない発言をする - 声のトーンが低い など 目的意識が弱く、発言しようとするが、ねらいと関係なく、自分の気持ちを優先してしまう子
非言語	A C - うなづき - 首をかしげる - 発表者を見る（視線） - 発表者に体をむける - 目を見開いている - 姿勢がよい - 真剣な表情 など 意欲はあるが、「恥ずかしい」「自身がない」といった心理的な原因も考えられ、発言できない子	B D - よそみ（視線） - いたずら - あくび - 発表者に体を向けていない - 姿勢が悪い - ぼんやりとしている など 目的意識が弱いことや、話し合いに対して「友だちが言ったから言わなくていい」など意欲が感じられない子、発言の仕方がわからない子

自主的に発言することは、意欲と大きく関わっていると考えられるため、話合いにみられる言語コミュニケーションの例と意欲の関係を表（表１）に整理してみた。発言につながる子どもの姿は、表のように教師が見取ることのできる言語コミュニケーションもあるが、目に見えない様々な要因も考えられる。

発言しない理由に、「恥ずかしい」「自信がない」といった心理的要因や、「何のために話合うのかわからない」といった話合いの内容と自分との関わりを見いだすことができないような、目的意識が低い場合なども考えられる。さらに、自分の考えを伝える発言の仕方や反論の仕方などの言語技術が身につけていないことや、話合いをするという経験が少ないことなど様々な要因が関係していることも考えられる。子どもがなぜ発言しないのか、発言できないのかを目に見える姿はもとより、見ない姿についても教師が、注意深く気を配る姿勢が必要だと考える。

3 目的意識を持たせる話合いの工夫

一人一人が「なぜこの話合いをする必要があるのか」「この話合いをすることで、どうしたいのか」といった目的意識を持たせることで、発言できるようになり、そして話合いが活性化すると考えた。表１におけるＢ・Ｄの子への意欲喚起の手だてとしても有効だと考える。

(1) 議題収集・選定について

議題収集をするとき、子どもから議題が出ないことや、レク的なものに偏ったりすることがあった。子どもたちが、目的意識を持って話合いを行うためには、子どもたちにとって身近で、切実な問題であることが大事である。

『特別活動研究1996/2』松橋浩行氏は、議題を収集するにあたり、次のようなプラスの方向の課題意識を持たせることが重要だと述べている。

☆学級にこんなものがあれば、楽しくなるのではないか。 ☆こうすれば、もっと〇〇が便利になるのではないか。 ☆今までやってきたことに、こんなことを加えると、よりよくできるのではないか。 ☆〇〇なら、自分ですぐにできそうだなあ。 ☆今回の〇〇はうまくいった。今度はこうしてみよう。
--

つまり、学級全般の批判・批評だけでは「学級生活をよくしよう」「自分の行動を振り返ろう」というような前向きな姿勢は生まれてこない。そのため、目的意識のある自主的な活動には結びつきにくい。

「どんな学級になりたいか」「この学級で、自分はどうしたいか」を常に意識した上で、議題を考えることが重要である。これは、学級目標に迫ることにもつながる。

(2) 話し合う内容（柱）について

話合いを進めるにあたり、話し合う具体的な内容が活動の活性化を大きく左右する。例えば、「スポーツ大会を計画しよう」といった場合に、スポーツの苦手な子は、意欲的にはなれないかもしれない。しかし、「チーム分けはどのようにするとよいか」という話合いであれば、自分なりの意見を持つことができ、意欲の向上につながる。

このように、たくさん子どもたちが、自分の意見として「自分は〇〇だからこうしたい」といった目的意識をしっかりと持ち、意欲的に話合いに参加できるような内容にすることが重要となる。

『特別活動研究1996/2』高橋敬夫氏は、「話し合いの柱は、適切な理由（根拠）による対立意見の出せるものがよい」としている。

- 友達同士の結びつきを強めること
 - ・男女の区別・好き嫌い・違った友達との触れ合い・より多くの友達との関わり合い
- 友達一人一人を尊重すること
 - ・友達を傷つけてはいないか
- 学級の生活をよりよくする具体的なこと
 - ・だれもが楽しめること・工夫できること・必要なことと不必要なこと

上記の例は、すんなりと結論がでるものではなく、対立や自分の中で葛藤して、話し合いが深まるものである。そうすることで、自分の考えと友達の考えを比べたり、深めたりすることができ、自分の考えをみんなにわかってもらいたいという気持ちが強くなれば、自然と発言につながると考える。

（表2）

4 発言を促す工夫

話し合いで、発言ができるようになるためには、実態把握をふまえた事前の手だてと、話し合いにおける具体的な手だてが重要になる。次に挙げる手だては、前に示した、表1におけるCの子への支援のあり方としても有効だと考える。

(1) 話し合いにおける児童の実態把握

話し合いにおける子どもを見取る方法として、教育臨床心理学の行動目録法（あらかじめ観察したい行動や起こりそうな行動を予想して表に表しておき、該当する行動が起きたらチェックする方法）を参考にチェック表を作成した。（表2）

実態を把握し、適切な支援を行うことで、発言できる子が増え、話し合いが活性化できると考えた。表2のチェック表で意欲が見られないという子は、表1のB・Dに属する子との重なりが見られた。

(2) 発言を促す具体的な手だて

発言を促す具体的な手だては、様々な方法が考えられるが、今回取り組む手だてを整理してみる。

行動観察チェック			月	日 ()	校時			
議題『			』					
名前		行動の様子					観察メモ	
		意欲 +	意欲 -					
	挙手	発言者 首をかしげる に注意	真剣な表情 うなずき	いたずら 姿勢	よそみ			

	手だて	方法	効果
話し合い前	①ウェビングでアイデアを広げる	・話し合いの前に、提示された議題から、思い浮かぶ言葉を次々と書く。	・自分の意見を持ち、整理するし、「なぜ話し合いをするのか」という議題の必然性や目的意識の高揚につながる。
	②学級会ノートの活用	・自分のめあてや意見を事前にノートに書いておく。	
	③教師からの上げまし	・学級会ノートにそれぞれが意見を書いた後、教師からのコメントを入れる。	
話し合い	④グループによるバズセッション	・少人数（4～6人）で、考えや思いを自由に発言する。	・少人数なので、ふだんあまり発言できない人でも気楽に意見を出すことができ、話し合いが活発に、内容も豊かになる。
	⑤友達の言葉かけ	・「どう思いますか」「大丈夫、発表してみよう」など友達の後押しで発言を促す。	・「恥ずかしい」などの心的要因を軽減させる。
	⑥教師の言葉かけ	・「真剣に考えているようだけど何かない」「うなづいたけど、賛成なのか？」など教師の後押しで、発言を促す。	・心的要因を軽減させる。

話 合 い	⑦ 教師や司会による意図的な指名	・「学級会ノートにいいことかいてあったよね」など全体で注目させることで、発言を促す。	・指名をされたことで、必然的に発言する機会を得ることができる。
	⑧ ネームプレートの活用	・自分の名前の書いてある札を賛成する意見に貼り、意思表示を行う。	・みんなに意見を伝え、司会者が発言を求めやすくする。
	⑨ ハンドサインの活用	・出された意見に対して、賛成はパー、反対はグー、保留はチョキ、といった方法で全員がサインを出して意思表示を行う。	・話合いに参加しているという所属感が生まれ、「発表してみようかな」という気持ちにさせる。
話 合 い 後	⑩ 振り返りカードでの評価	・自己評価表をり、話合いの後や活動後、自分の成長やお互いのがんばりを振り返る。	・自分を振り返ることができ、次の活動へつなげることができる。反省点は、次のめあてにもなる。
	⑪ 学級会ファイルの活用	・学級会ファイルは、学級活動シートや振り返りカードをポートフォリオファイルのようにとじていく。	・学級会の足跡が残ることで、手順を振り返ることができたり、反省などから、自分の成長を見つめ直すことができる。

話合いを活性化するには、学級の基盤として、なんでもいいあえる雰囲気作り(学級経営)や伝え合う力を育てる(他教科・領域との関連)といった手だても重要である。

上記のように、児童の実態を把握し、それぞれの場面において、手だてを具体的に計画し、見通しをもつことで、話合いの活性化と自主的な活動につながると考える。

5 集団決定にむけての教師の役割

子どもたち自身の自治的・自発的な話合いを目指しているところではあるが、そこに至るまでには、子どもの発達段階に即した教師の指導や支援が必要になってくる。

(1) 発達段階に即した指導のめやす

学習指導要領解説 特別編を参考に、話合い活動における発達段階に即した指導のめやすをまとめてみる。

低 学 年	仲良く助け合い学級生活を楽しくする段階 自分の意見を主張することのみに集中することがあるので、互いの意見をよく聞いたり、気遣ったりして、仲良く助け合って話合いを進めることの大切さを指導する。
中 学 年	協力し合って楽しい学校生活をつくる段階 ある程度まで、自分たちで、学級会を運営していくことができるようになるので、話合い活動の計画を作成する計画委員会を設け、これらの役割を十分に指導しながら、少しずつ話合いが自主的にできるように指導する。
高 学 年	信頼し支え合って楽しく豊かな学級や学校の生活をつくる段階 自治的な活動の範囲を明確に示した上で、児童が活動計画を作成し、自主的に進められるように配慮する。話合いの質を高め、効率的、計画的に話合いが進められるように指導する。

発達段階に即した話合いを継続することで、学年が進むにつれて、議題の選定や話合いの内容などの経験値が上がり、質の高まりにつながっていく。

(2) 質の高まる話合いにおける教師の指導・支援

話合いは子どもたちが自主的に進めていくものであり、子どもの手に委ねなくてはならない。しかし、実際には、子どもたちだけで、進行していくことやめあてに沿った話合いにしていくことはなかなか難しい。それは、一人一人の意識の高まりや意見を持っていること、話合いの経験を積んでいることなどが全員に求められる条件となるからである。

『話し合い学習の指導』鴻巣良雄氏(1984)は、話合いの中で、教師の指導・支援について、次のように述べている。「その場の子どもたちの様子を熟知したうえでないと、は

っきり解答はできないが、ただひとつ、教師は真剣になって指導し、積極的にリードして欲しい。教師の話合いの指導は、とかく遠慮がちで、教室の片隅で子どもたちの話しぶりを聞くことが多い。これではいけない。もっと教室の中央に自分のいすを持ってきて、子どもたちの話し合いを積極的にリードする必要がある」と言っている。

教師の積極的な関わりから、質の高まる話し合いを学び、徐々に自治的な話し合いができるようになると考える。話し合いにおける教師の指導・支援についてまとめる。

	指導・支援	
話し合い前	①話し合いのめあてを確認する。個人のめあてが全体のめあてにつながることを認識させる。 ②提案理由の補助となるような情報を提供して、話し合いの意欲を高める。 ③場所や時間などあらかじめ決まってい、変更できない条件を確認する。 ※話し合いの意欲を高めることが大切で、話し合いの時間を確保するためにも短時間で行う。	
話し合い	①話し合いを中断し、指導、助言を行う。	
	話し合いの内容(柱)から離れている時	○何を話合っているかを明確にする。 ○意見を整理し、話し合いの方向性を示す。
	話し合いが停滞した時	○実態や現状などを想起させる。 ○出された意見の中から、賛成理由のあったものをいったん絞り込んで、話し合いを深める。 ○小グループや近くの人と相談する時間を設定する。
	意見がたくさん出て、混乱した時	○複数の意見をまとめたり、提案理由に近い意見はどれなのか、めあてを達成できそうな意見はどれなのかを考えさせ、話し合いの方向性を示す。
	児童に任せられない条件が出た時	○意見が出たときに、なぜ決められないのかを明確に伝え、方向修正をする。 ・個人情報やプライバシーの問題 ・教育課程の変更に関わる問題 ・相手を傷つけるような結果が予想される問題 ・校内のきまりや施設 ・設備の利用の変更に関わる問題 ・金銭徴収に関わる問題 ・健康・安全に関わる問題 等
	実践不可能な事が決まりそうになった時	○明らかに実践不可能な場合は、早めに方向修正をする。 ○工夫して実践できそうであれば、アドバイスして、ルールの工夫などを行うようにする。
	②意見を持っていて発表できない子への声かけをして発言を促す。 ③司会の進め方がわからなくなった時、助言したり教師が副司会の役割をして会を進める。 ④必要に応じて子どもの発言の確認をする。 ⑥子どものつぶやきの拾い上げをする。 ⑤めあてに沿っているかゆさぶりをかける。 ⑦板書の整理 ※全体の流れを把握しながら、個への支援を行う。教師は、決議を左右したり、くつがえすような発言は控える。	
話し合い後	①話し合いでのよりよい意見、よい話し方や態度面を取り上げ、成長の見られる子を賞賛する。 ②少数意見の良さを取り上げ、他で生かせないか考えさせる。 ③司会団にねぎらいの言葉をかける。 ④話し合いの中で課題となったことを次の話し合いのめあてとなるよう、意識付けをする。 ⑤実践にむけての意欲付けや今後の見通しをもたせる。 ※全員の評価・賞賛は時間的に難しいため、児童の自己評価や相互評価を活用する。	

(3) 集団決定について

学級集団が互いの意見を出し合いながら、話し合いを行うとき、話し合いに参加した全員の意見が一致した集団決定をすることは難しい。実際には、自分の意見が取り上げられたり、他者の意見に折り合いをつけて集団決定をしていく。その時には、子どもたち一人一人が納得して決定しているかということが重要になってくる。

納得した集団決定となるためには、自ら判断して他人に迷わされないようにし、自分自身が納得しなければならない。すなわち自己決定できることが大切である。

自分の考えを発言し、学級集団に伝え、互いの意見を理解する話し合いができれば、たとえ多数決などで、自分の意見が取り上げられなくても、今回は決定に従ってがんばろうという折り合いを付ける意識につながるであろう。話し合いがなされない中での多数決は妥協で、折り合いを付けるということとは異なる。

互いの意見を理解して自己決定をし、納得のできる集団決定ができるような質の高まった話し合いとなるためには、発達段階を踏まえて、話し合いの経験を積み重ねることが大切である。

また、児童の実態を踏まえた上で、子どもの考えに寄り添いながら、柔軟に対応していく教師の支援も重要である。しかし、単に子どもの考えに寄り添うのではなく、話し合いのめあてにつながっているかを見極め、真意を捉え、少数意見を大切にしながら発言させるというような視点を、教師がしっかりと持つ必要がある。

VI 授業実践

- 1 議題名「きらきらプランを成功させよう」
- 2 議題選定の理由

本学級では、これまでに8回ほどの話し合い活動を実践してきた。自治的な話し合い活動が初めての子が多かったため、2回の話し合いは教師が司会を務め、3回目から司会団による話し合いに取り組んでいる。内容としては「係りを決めよう」「スポーツ集会をしよう」「雨の日の遊びを考えよう」など子どもたちが今までに経験のある話し合いが多かった。話し合い活動では、一人一人が意見を出して、納得のいく集団決定にまではいけなかった。具体的には、自分の意見を発言できない子や、意見を表出させるネームプレートを掲示するときに、自分の考えよりも友だちに同調してしまう子などが見られたからである。

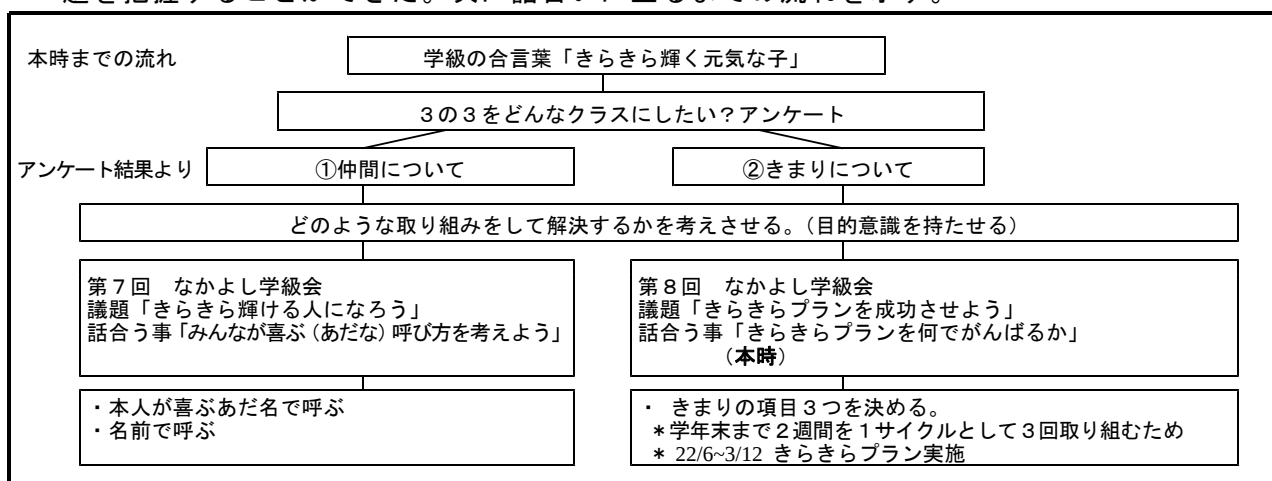
議題を選定するに当たり、話し合いに関するアンケート調査を実施し、次のような結果が実態として見えてきた。(アンケート実施 1月12日 3の3 35名)

- ・話し合いはやった方がよいと思っている子・・・82%
- ・話し合ってみたいこと・・・スポーツ集会、お楽しみ集会、係り活動についてなど
- ・話し合いをしてよかったこと・・・みんなで何かするのが楽しみのになった、司会ができた等

この結果から、話し合いは必要だと感じており、みんなで取り組む活動を楽しみにしていることがわかる。しかし、話し合いの内容がレク的なものが多いため、レク活動に強く興味を持ち、発表力のある子の意見が多く採り上げられていた。また、生活課題については、議題として取り上げられていない。それは、よりよく生活しようとする目的意識が弱いため、議題としてあがらなかったり、クラスの問題について真剣に話し合い、解決する方向性を見つける

ことができたという経験が少ないためだと思われる。

3年3組は「きらきら輝く元気な子」を合言葉としている。そこで、今のクラスにおいて良い点や問題になる点がないかを意識させるため、事前アンケートを行い、2つの大きな課題を把握することができた。次に話合いに至るまでの流れを示す。



今回の話合いでは、どのような内容に取り組めばよいかを「きらきらプランを成功させよう」という議題で話合う。話し合う内容は、「きらきらプランを何でがんばるか」であり、具体的には、学級として重視するきまり(ルール)を3つにしぼる話合いを行う。自分の身近な問題としてきまりを見つめ直し、よりよい学校生活に対する考えを出し合う事は、学級全体が目的意識を持ち、課題の解決策を探る話合いにつながると考え、本議題の選定を行った。

3 本時までの取り組み

実施月日	内容	時間	対象
1月12日	どんなクラスにしたいかアンケート	朝の会	学級全員
1月18日	議題の整理・「きらきらプラン」の設定	昼休み	計画委員
	議題の提案・設定	帰りの会	学級全員
1月19日	話合いの内容(柱)、役割分担	放課後	計画委員
1月20日	学級会の確認 日時・議題・めあて・話合う内容(柱)など	朝の会	学級全員
1月22日	自分の意見を学級会ノートに記入	朝の会	学級全員
1月25日	話合いの準備 流れの確認など	放課後	計画委員
1月26日	本時「きらきらプラン」を成功させよう	2校時	学級全員

4 本時の展開

(1) 目標

- 目的意識をもち、自分の考えを表出することができる。
- 自他の意見を整理して自己決定ができ、納得のいく集団決定ができる。

(2) 授業仮説

話合いにおいて、学級ノートに自分の意見を書いておくことや、教師の一人一人を見取った声かけをすることにより、自分なりの考えを表出することができるであろう。

(3) 展開

議 題	きらきらプランを成功させよう
本時のめあて	みんなで協力してきまりを守ること、学校生活が安全で楽しくなるようにする。

提案理由		学校生活の中で、ろうかを走ったり、整理整頓ができていなかったり、けんかをした りなどきまりを守れなくて、先生に注意されたりしている。高学年の4年生になるまで に、みんなで協力して、少しでも良くなりたいからです。	
話合うこと		きらきらプランを何でがんばるか。	
過程	話合いの流れ及び・ 予想される子どもの反応	教師の支援・援助	〇評価
導入 5分	1 はじめのあいさつ 2 司会団紹介 3 議題の確認 4 話し合いのめあての 確認 5 先生の説明	・話し合い活動は、個人のめあてが 全体のめ あてにつながっていることを確認する。 ・話し合いでの視点を確認する。(何のために話 合うのか目的意識をしっかりと持たせる。)	・話し合いに意欲的 に参加しようとし ているか。 (関心・意欲・態度)
	6 話し合いの柱 「きらきらプランを何で がんばるか」 7 意見の出し合い ・ろうかを走らない ・忘れ物をしない ・遅刻しない ・授業中集中する ・すききらいしない等	・多くの児童に自分の意見を述べさせる。 ・行動観察チェック表を活用して、意見を 表出できない子に、声かけする。 ・友だちの考えを理解したり、自分の考えを明 確にするために、常に話し合いのめあてを意識 しながら、友だちの意見を聞いたり、自分の 意見と比べさせたりする。	
	8 質問タイム 9 賛成、反対意見 10 再度全体の意見を磁 石で見る。	・順番を守って、黒板にネーム磁石を貼ら せ、各自の意見を表出させる。 ・一人一人のよさを生かした内容を考えさ せる。	
	11 多数意見が出た場合 の集約・統合時間	・どのような内容がめあてにあっているか、全 員で協力することができたり、互いのよさを 生かすことができか、もう一度考えさせる。 ・集団決定していくことを意識させる。(今回 は3つにしぼる) ・意見が多数出た場合は、集約統合できないか を考えさせる。 ・話し合っても折り合いがつかず、意見がまと まらない時は、多数決を取ることを確認する。 ・めあてにそった意見をみんなに伝えることが できたか考えさせる。	・友だちの意見を聞 き、自分の考えと の比較を行っているか。 (思考・判断)
	12 決まったことを発表 する。		◎自己決定した自分 の考えをネーム磁 石で、表現するこ とができたか。 (技能・表現)

資料4のアンケートでは、「学級会はやった方がいいですか」の質問に「やったほうがいい」と答えた児童が取り組み前には82%であったのが、アンケートから議題を取りあげた話し合い後には100%になり、18ポイント増加している。

資料5のアンケートでは、「自分の考えを発表することができますか」の質問にできないと答えた児童が事前では12%、事後が3%に減少した。

資料3 検証授業より

児童A	今日話し合う事は何をがんばるかなので、スポーツ大会はやった方がいいけど、きらきらプランでがんばるものを決めた方がいいと思います。
教師	Aさんの言いたいことわかった？「今日のめあてにスポーツ大会は、合っていないと思う。」って言っているんだよ。どうかな？
児童B	スポーツ大会に賛成。みんなと一緒に遊べて仲良くなると、きらきらがやく子に近づくからです。
児童C	スポーツ大会は、他でやればいいと思います。
児童D	スポーツ大会に賛成です。安全やがんばることには関係ないけど、協力や楽しくということには関係があるからです。
児童E	スポーツ大会に反対です。休み時間や昼休みにできるからです。
児童F	スポーツ大会に反対。今日のきらきらプランを成功させようで議題にあまり関係がないと思います。
児童G	スポーツ大会に賛成です。きらきらがやく元気な子になれそうで、いいと思ったからです。
児童H	スポーツ大会に反対です。めあてはみんなで協力してなので、遊ぶということとは違うと思います。

【考察】

(アンケート実施 1月26日 3の3 35名)

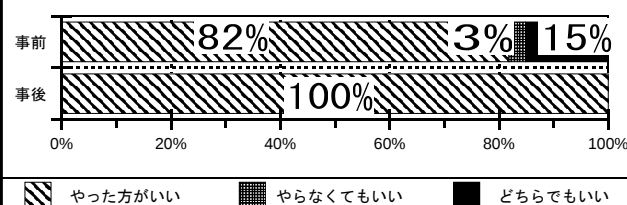
質の高い話し合いにするためには、一人一人が意見を持ち「なぜ話し合いをする必要があるのか」という必然性や目的意識を持っていなければならない。児童一人一人が意見を持ち、話し合いに望むことができるように資料1のウェビングを行い、いろいろな方向から意見や考えを吟味し、その中から自分の意見として、資料2の学級会ノートに書き込ませた。そうすることで、自信を持つことができ、発言につなげることができたのであろう。アンケート結果からもウェビングや学級会ノートが有効だったといえる。

資料3の授業記録から、「スポーツ大会はみんなでやると楽しいからやりたい」という考えに対して、スポーツ大会が今回の話し合いの内容とは違うことを主張する子がいた。これは、議題やめあてと照らし合わせて、レク的な内容ではなく、身近な問題を話し合いで良くしていくという、目的意識をしっかりと持つことができていたといえる。その意見を聞いて、納得した子は意見が変わり、今回の決定ではスポーツ大会には決まらなかった。

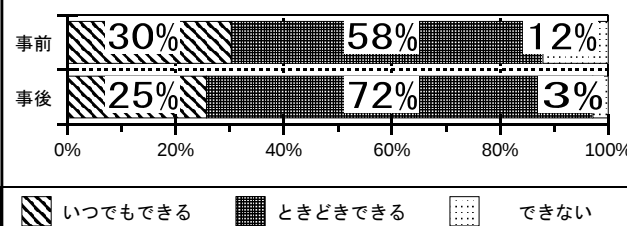
資料4は、話し合いをした方がいいと思っている理由として、「みんなと話し合いをすると楽しいから」「3組が仲良くなるから」などを挙げている。話し合いをすることで、課題を解決できたり、望ましい集団になれるような提案をしたりと目的意識を持つことができつつある。集団として高まる経験を積み重ねることで、自主的・実践的な態度が育ち、さらに話し合いに取り組むといったサイクルが生まれ、次回の学級会を楽しみにしているという声も聞かれるようになった。

話し合いにおいて、自分の考えを発言できることを目指し、さらに、お互いの意見を出し合うことが大切であるという全員参加の意識を持たせることにも気をつけてきた。例として、話し合いのルールを児童と作る(確認した)際に、「自分の意見をちゃんという」ことも挙げていたが、他者の意見を聞くことも大事であるということから、「発表の少ない子を優先して指名する」「励ます」という意見が挙げられた。資料5から、発言できる子が増えたということは、話し合いに主体的に関わろうとしている児童が増えてきたことと考えることができる。さらに、「ときどきい

資料4 「学級会はやった方がいいですか」



資料5 「発表することができますか」



える」が増えていることは、自分だけが発言するのではなく、よりたくさんの友達が発言した方がよいという全員参加を意識しているからだと考えられる。このことは、話し合いの質にもつながっていくのではないかと考える。

以上の結果から、話し合いにおいて、議題の必然性や目的意識を持たせ、話し合いの内容を工夫すれば、自分の考えをしっかりと持つことができ、発言することができるといえるであろう。

話し合いにおいて発言することができるようになることで、話し合いの良さを実感し、目的意識を持ち、課題見つけや議題の提案ができていくことで、自主的・実践的な態度につながっていくと期待される。

【検証2】

話し合いにおいて、教師が子どもの言語・非言語を捉え、子どもの意見をつなぐ役割ができれば、自他の意見を整理して自己決定することができるであろう。

【結果】

資料6は、検証授業の記録である。話し合いで発言したことのない児童に声かけの支援を行い、発言することができた。教師が声かけをしたことによって発言できた児童は、11人であった。

資料7は、自己決定についてのアンケート結果である。

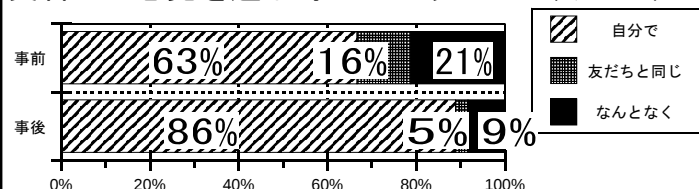
「話し合いでどうやって意見を決めますか」の質問では、「自分で」と答えた児童が事前では63%で、事後には86%となり、23ポイント増加している。

資料8は、「学級会をして良かったことは何ですか」の質問に、複数回答した結果である。事前、事後とも一番多かったのは、「発表ができるようになった」で、事前が13人、事後は30人で、17人増加した。また、すべての項目において、事前より事後のアンケート結果が増加している。

資料6 検証授業より

教師	(机間指導をして)
	ふたりともみんなが思いつかなかった意見を書いてるね。すばらしいと思うよ。勇気出してみんなにわかるように発表してごらん。
児童①	(少し考えてから、挙手をして)
	最近宿題をしない人がいるので、やるべきことはきちんとやった方がいいので、宿題をきちんとやるがいいと思います。
児童②	はづかしいからいいない。
教師	司会さん。児童②がみんなと違う意見持ってるから、あててあげて。みんなもきいてくれる。
全員	いいよ。
児童②	先生や友達の手伝いをするがいいと思います。言われる前にやってあげると、やってもらう人もやる人も気持ちがいいと思うからです。

資料7 「意見を選ぶ時どのようにして決めますか」



資料8 「学級会をして良かったことは何ですか」



【考察】

資料6のように、検証授業で児童①②は、話し合いではじめて発言できた。自己決定してネームプレートで自分の意見を表出させる時に、児童②の意見に賛成しているのは、1人だったが、自分の意見がよいとネームプレートをおいた。意見交換の場で発言でき、友達の意見と比べ合わせて、自分の意見がよいと自信をが持つことができ、自己決定できたと考える。

資料7の結果に見られるように、話し合いの決定事項について「自分で決める」という児童が、23ポイント増加した。これまでは、ネームプレートで意思表示をする際、仲のいい友達に同調し

て意見を決めている姿も見られた。そのため、話し合いの振り返りの際、感想に「自分の判断で決められたのでよかった」と書いている子を度々紹介したことで、自分で決めることは難しいが、良いことであると認識させることができ、自分で決定する児童が増えてきたと思われる。話し合い活動において、つけていきたい力を適宜とらえて意識させ、教師が取り上げることでモデルができ、自己決定ができるようになったと捉えることができる。アンケートの結果で、全体の86%の児童が、友達の意見も聞くが、最終的には自分で判断できるようになってきていることがわかる。

資料8の結果から、話し合いにおける良さを実感してきていると考えられが、実感として捉えている内容は「発表できる」で、話し合いに自主的に取り組んでいる事が推測される。「みんなの考えがわかる」「話し合う事が楽しくなった」「みんなで何かするのが楽しみのようになった」など、話し合いに意欲的に取り組めたことは、自他の意見を整理して、自己決定し、納得した集団決定【資料9】をすることができたからだと考えられる。

資料9の児童の日記では、「自分に自信が持てる」「自分から計画して」というような言葉や、その他の児童の日記にも「自分の出した意見には決まらなかったけど納得した」「決まったことをみんなで頑張りたいです」といった内容が書かれていることから、自他の意見の良さを取り上げ決定していることがわかる。

以上の結果から、話し合いにおいて、子どもが発言に自信が持てるように教師が支援することで、自分の意見と友達の意見を比べながら聞き、整理して自己決定ができたといえるであろう。自己決定できることが、自主的な実践活動につながる集団決定にもつながっていくと考える。さらに、話し合ったことを実践につなげることで、児童自身が意識して努力したり、自らを高めたりできるような自主的・実践的な態度が育つであろう。自主的・実践的な活動を積み重ねることで、望ましい人間関係の構築や、社会性の育成につながっていくと考える。

学級会について
わたしは、学級会をやった方が良いと思います。なぜかというと、みんなでクラスのことを決められるし、自分の意見に自信がもてるからです。なので、わたしは、これをきっかけに、3年生だけじゃなくて、高学年に上がったときは、自分から計画をしてすすめたいです。

Ⅷ 研究の成果と課題

1 成果

- (1) 議題の必然性や話し合いの内容（柱）を実態から選ばせることで、目的意識を持たせ、自分の考えを明確にして話し合いに望ませることができ、発言をとおして、自己決定、集団決定ができた。
- (2) 自分の考えを持ち、発言できるようになったことで、話し合いでは互いに理解し合い、話し合うことの良さを実感し、話し合いで決定したことに、意欲的に取り組もうとする姿が見られた。

2 課題

- (1) 話し合いの質をさらに高めるための、内容やタイミングなど、より具体的に整理した教師の指導と支援のあり方
- (2) 発達段階をふまえた、学年や時期に応じた指導計画の作成

《主な参考文献》

『小学校学習指導要領解説 特別活動編』 文部科学省 東洋館出版社 2008年

『話し合い学習の指導』 鴻巣良雄著 明治図書出版 1984年

『特別活動研究 2』 明治図書出版 1996年